

西洋から見るサムライ

リミノヴィチ・アンナ

．はじめに

侍と言えば、日本を象徴するもののひとつである。日本について考える外国人は、すぐ芸者や折紙、空手などを思い浮かべるかもしれないが、必ずみんなもう一つ自分で作り上げた「侍」のイメージを持っている。そのイメージは様々なものに影響されて、形作られたものである。このレポートでは、侍文化の全体像を考察するつもりはなく、私は自分の抱いている「侍」イメージについて書いてみようと思う。

まず、忠臣蔵に表された理想的な侍に、映画の発達と西洋の映画作品がどんな影響を与えたかについて考えたい。そして、全世界に新しい侍のイメージを示した黒澤明監督の時代劇について書きたいと思う。次に、宮本武蔵を例にして、日本における代表的なヒーローのイメージと脚色によるイメージの違いについて述べ、最後に、現代の日本におけるサムライスピリットについて考えたいと思う。

さて、時代劇に登場する侍たちから始めよう。

．時代劇におけるサムライの典型

初めて西洋の映像作品が紹介されたのは、1897年、大阪でだった。その直後から日本における映画製作の歴史が始まる。初期の日本映画は演劇のようなもので、だいたい芸者の踊りや、ダンスのような決闘（立ち回り）のシーンなどを見せた。

しかし、日本の映画は西洋映画に影響され、それは、特に、時代劇において顕著である。新劇と歌舞伎を組み合わせた新国劇は時代劇を生みだし、西洋の映画技術、例えばカメラの激しい移動などを取り入れた。初めて作られた新しい時代劇の映画といえば、野村監督の『国定忠次：雁の群』であった。しかし、これより、牧野省三の『浮世絵師・紫頭巾』のほうが人気があった。牧野映画は、とにかく芝居を面白くし、その作品に必要ではなくてもアクションを入れるという決まりがあった。新しい“チャンバラ時代劇”のスタイルを発明した。

牧野監督の『浮世絵師・紫頭巾』は剣客でありながら、個性的というより、反逆的な新しいヒーローを生み出した。『紫頭巾』は謎の剣士報竜太郎が主人公で、このヒーローはものすごく魅力的であった。紫頭巾に頭を包んだ正義の剣士、報竜太郎はその剣、妖刀村正をふるって、悪者たちを切り倒した。たくましく、率直なアメリカンヒーローを手本に作られた『紫頭巾』のニヒルな微笑をたたえた勇敢な主人公は、以後生まれる同じよう

な性格のヒーローたちの鋳型となった。

新しい時代劇はたいへんな人気を得た。刀による戦いだけではなく、権力に立ち向かう姿勢が何より気に入られたようだ。大地震後の日本では、多くの社会通念が変わり始めた。英雄と見られたのは権力者に立ち向かうサムライと、昔からいるアウトローであった。この時期、時代劇映画の制作が急激に増えた。以前からある歌舞伎や講談、立川文庫の話などが時代劇の企画に上った。そして、リアルな立ち回り、話の展開のスピード化をうながした。またこの時代に輸入されたアメリカの西部劇や活劇の表現テクニック、ヨーロッパ映画の心理表現が、若い作家たちに吸収された。

寿々喜多呂九平は新しいヒーローとして、「浪人」を導入した。寿々喜多の作品における主人公は、誰に忠義を誓うわけでもなく、自由で、さびしい、疎外されたヒーローであった。忠臣蔵の浪人はみな忠実であり、主君に従ったが、1920年代の浪人たちは誰にも従わない。彼らは、主従関係を信じないだけでなく、実はなにも信じておらず、ニヒリストと呼ばれた。浪人たちの世界には、道徳がなく、自分以外信用できる者はいない。1928年に、牧野雅弘監督の『浪人街』に出てくる浪人は、身分という社会制度を無視し、自分の信念に忠実である。1930年の『斬人斬馬剣』では、浪人の主人公は、主君に反抗する村人たちの指導者になる。新しい時代劇が人気を得たのはそのような使命があるからではなく、主人公が剣の達人であっても、ひとりの人間であるからだった。例えば、1936年の伊丹万作監督の『赤西蠣太』の主人公は、恋人より飼っている猫が好きで、目上の人間を気にしない、胃痛に苦しむ侍であった。

時代劇を撮った監督たちの中でもっとも知られていたのは、伊藤大輔（『忠次旅日記』『新版大岡政談』『丹下左膳』『斬人斬馬剣』）と、牧野省三（『国定忠次』）そして山中貞雄（『伊丹下左膳余話・百万両の壺』『左門捕物帖三十番手柄』『人情紙風船』）の3人であった。この3人は、新しいニヒルな浪人のヒーローを登場させ、西洋の影響を受けて、時代劇を革新した。彼らはその作品において、世界は残酷であることを写實的に描こうとした

1937年から、すべての映画製作は、軍国政府に管理された。傾向映画は禁止された。その後すぐ、「忠義」を否定的に扱うような映画も、写實的な時代劇も禁止になった。1939年からは空論映画（国策映画）しか求められなかった。第二次世界大戦後、アメリカに支配された政府は日本の映画製作を再開させた。しかし、アメリカは禁止する映画のテーマを表にした。そのテーマの中には、もちろん、「忠義」もあった。そして、サムライに代わり、民衆のために戦うヤクザが英雄になった。

その時、伊藤や山中などの映画に影響を受けた黒澤明が現れた。黒澤の時代劇は930年代のものと同様、写實的で、人道主義を柱としていた。よく知られている時代劇としては『七人の侍』『羅生門』などがある。黒澤が最初に撮った時代劇は『虎の尾を踏む男達』である。その話では、日本のもっとも有名な武将の一人、源義経が、兄頼の追っ手から逃

れようとしている。彼に従うのは数名の家臣と弁慶である。安宅にある関所を通らなければならぬが、安宅の関は頼朝の手に抑えられている。仮装している彼らが、関を通れそうになった瞬間、義経が見破られる。すると、弁慶は彼を打ちすえて、その場をごまかそうとする。家臣が主を打つことは封建時代である当時の日本人の精神構造においてありえないものだった。それで、義経であると知りながら心を打たれた関守の富樫は、関を通してやるだけでなく、番卒達に酒を持たせてあとを追わせる。この話で、いちばん興味深いのは富樫という人物である。富樫は本当にそれが義経と知っていたのだろうか？そして、もし知っていたなら、なぜ彼を逃してやったのか？黒澤の作品に登場するいろいろな人物の中でいちばん謎に満ちている。

『羅生門』も普通の時代劇ではない。時代劇の舞台は普通江戸時代だが、『虎の尾を踏む男達』と『羅生門』の舞台は中世である。シナリオは芥川龍之介の『羅生門』と『藪の中』に基づいている。羅生門の下で雨宿りしている下人が最近起こった殺人と強姦について話している。シナリオの中心にはひとつの事件があり、それを四つの視点から語るのである。三つは、三角関係になった夫、妻、山賊のそれぞれが語り、あと一つはただ一人の証人、杣売が語る。『羅生門』は尋問で証言された通りに描かれている。そして、それらの話に含まれる事実と細部が1930年代の映画と同様虚無的に語られる。

1957年の『蜘蛛巣城』のストーリーはシェイクスピアの『マクベス』である。武将鷲津武時は友人の武将三木義明とともに森の中で道に迷って、妖婆に出会う。妖婆は、鷲津は国守となるが、そのあとを継ぐのは三木の子孫だと語る。二人は国守の都築国春から武勇を賞せられたが、それにもかかわらず鷲津は都築を暗殺し、ついで三木も殺す。そして、もう一回妖婆のところに行った鷲津は森が動かない限り自分は安泰だと告げられる。まもなく三木の遺児が鷲津の蜘蛛巣城を攻めるのだが、森の木を使って軍をカモフラージュしたため、攻め寄せるとき森が動くように見えた。鷲津の妻は狂ってしまい、鷲津は敵の矢に射られて死ぬ。黒澤は登場人物の性格を単純化した。黒澤のマクベスは大人物ではない。最初から先入観にとらえられ、強迫観念に悩まされ、自分が殺されるのを恐れたため主君を殺すことをためらう。彼は、小心者であり、欲望に引き裂かれているだけなので、彼の死にはだれも心を動かさない。

1961年の『用心棒』と1962年の『椿三十郎』は喜劇映画、あるいは、チャンバラのパロディーである。この二つの映画では、主人公は三十郎という浪人である。彼は、どこからかやって来て、どこかへ去って行くよそ者である。町の住人を救う義理などない。だから、主人公の行為は不条理な無償の行為である。三十郎は悪い奴はとにかく悪く、彼らの所行は罰せられることなく放置されるべきではないと思っている。三十郎は貧乏で、世をすねた、道徳などなんとも思わない人物である。彼は剣客の当然の使命として、試練を受け入れる。墮落しきった町を掃除すること以外には何ひとつ手

を出していないし、彼の行動の背後には、道徳的で偉大な目的など暗示されない。

黒澤作品の中でもっとも知られているのは『七人の侍』である。ある村が毎年、野武士に襲撃され、農民たちは作物だけではなく、時に命まで奪われる。何か対策をほどこそうと、老人たちは、手を貸してくれる侍をさがすために、村を出る。そして、勘兵衛たちに出会って、村に連れ戻る。侍たちは村に入るとすぐ、戦の準備にかかる。そして、村人たちと一緒に戦って、野武士をやっつける。この映画は3つの人間集団（100人以上の農民と、40人の野武士、そして7人の侍）を描いている。黒澤は7人の侍をそれぞれ個性ある人間として扱い、ひとつの冒険にどのように参加したかを描いている。彼らはふつうの侍ではなく、またどこにでもいる人間でもないからである。

7人の侍の中で農民たちの目的を自分自身の大義にするのが勘兵衛である。彼の意志は社会的な広がりを持っている。彼は村を救おうとする。真の指導者らしく、勘兵衛は自分の部下のことをよく知っている。そして、彼らをひとりひとり唯一の人間として扱い、その個性を尊重している。もう一人は、剣客の久蔵である。彼は口数が少なく、内向的だが、自分の刀と同じように、必要な時だけ自分を役立てようとする。彼は、一見おだやかであるが、人を殺しても何も感じない人間である。勝四郎は7人の侍の中でいちばん若い。ほかの侍たちにはまだ子どもと思われ、子ども扱いされているが、実際は、大人になる直前だ。もっともおもしろい侍は菊千代である。彼は武士として生まれてはいない。農民の出身であるが、侍として死ぬ。みんながいちばんかわいそうに思うのは、彼の死である。それは彼があまりに気が小さく、あまりに人間的だったからである。勘兵衛はまるで超人のようだが、菊千代はまったく人間的である。彼にとって、勇気は生来のものではなく、獲得されるものである。



黒沢明監督『七人の侍』

映画の終わりで、農民たちは救われ、村はむかし通り平和になるが、三人の侍しか生き残っていない。しかし、彼らの仕事は終わった。例えそれがつまらないことであっても、もう関係ない。ここにあるのはヒロイズムである。このように、黒澤の禁欲的なヒロイズムは、厳密な意味で絶望的であり、しかも寛容を必要とする。『七人の侍』には、リベラルな精神があふれており、伊丹や山中と考え方は全く同じである。この作品では、うぬぼれる人間が多く見られるが、悪はヒーローの人間性に負ける。黒澤の時代劇は、大戦前の映画から影響をたくさん受けたが、ヒーローの特徴は西洋映画（特にアメリカの西部劇）から来ている。

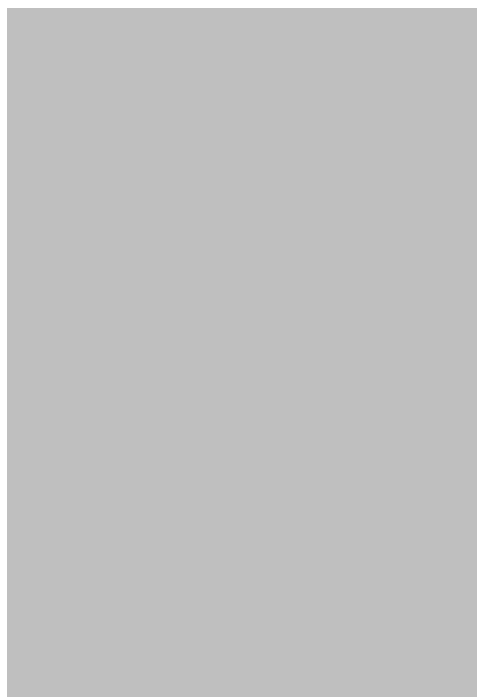
その後、時代劇はだんだんテレビに乗っ取られていった。そして映画では、時代劇に代わって、股旅者の延長上にあるヤクザを主人公とする映画が大ヒットした。しかし、ヤクザの作法はサムライの礼法の真似であり、忠臣蔵の精神を受け継いでいる。その新しいアクション映画は初期のチャンバラに似ており、たいていどの映画にも一回は決闘があった。

現在、時代劇はあまり人気がない。いくつかのテレビドラマ以外ほとんど目にしなくなった。テレビが時々、古い時代劇をリメイクしているが、若い人たちはもう時代劇に興味を覚えない。私が、時代劇が好きだというと、友だちのみんなに笑われてしまう。

・さまざまな武蔵

ヨーロッパの騎士と全く同じで、侍は剣術の修業をする。宮本武蔵は世界中どこでも知られている修業者である。武蔵の生涯は映画やマンガなどに描かれているが、彼が書いた『五輪書』はアメリカの実業家たちの間では聖書のように大切に思われている。武蔵について知られていることは少なく、彼の生涯はいろいろに脚色されている。どのように脚色されていてもすべてに共通しているのは、武蔵が一人前の男になるためにいろいろな困難を克服することである。

ほかの日本のヒーローと同じように、武蔵は若い頃両親を失った。義経の場合と同じで、少年のころ、彼には剣術の才能のあることが明らかになった。そして、1600年の関ヶ原の戦いで、徳川家康と戦う石田三成の軍隊に入った。その後、日本中を旅して回り、剣術修業をした。剣を持たない時襲われないように、武蔵は、普通の日本人とは違い、お風呂には入らなかったのも、出会って好意を持たれるはずはなかった。だから、一度も結婚していない。実は、武蔵は女嫌



神田たけ志『宮本武蔵』

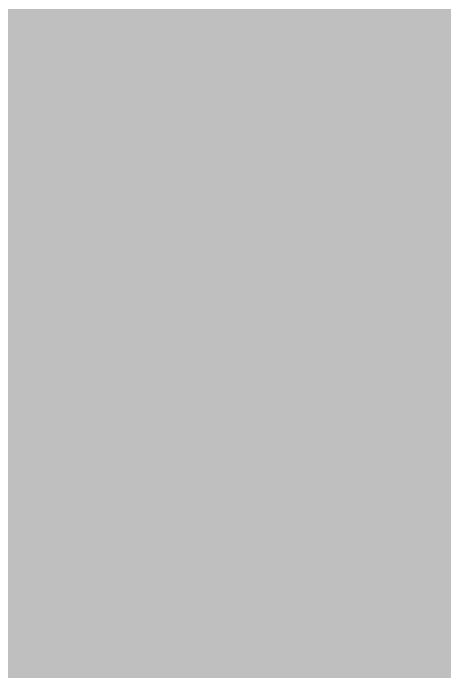
いのように、彼の純潔を汚そうとする女はいつも撃退した。どのように脚色されても繰り返し出てくるシーンであるが、武蔵は、裸で滝の水に打たれ、美女によって刺激された性欲を押し殺す。

武蔵はニヒリストであった。一般社会とは縁を切り、自分ひとりで生きていこうとする。彼は、もっぱら旅をしながら、真の道をさがしていた。彼の人生は、最後まで人間形成であった。うわべだけ上品な一般社会の規律を破ってでも、剣の道を悟るという唯一の目的を遂げようとした。武蔵のような修業者は精神主義のお手本になった。ヒーローの修業を描く物語や映画などは「根性物」と呼ばれている。精神主義と根性には、抑圧的な目的と情熱、際限のない辛苦がよく含まれている。そして、修業は禅の鍛錬になる。武蔵に殺された修業者の中に佐々木小次郎という侍がいる。神田たけ志の『宮本武蔵』というマンガでは、小次郎は典型的な美少年であり、武蔵に決闘を申し込むだけでなく、誘惑までしようとする。小次郎は意志が弱く、精神主義が理解できないようだ。彼は、もっとも大切なのは剣だと考えるが、小次郎の師匠は修業しなければならないのは剣でなく、気だという。武蔵と小次郎の決闘は武蔵の勝に終わる。そして、武蔵は剣の道を悟ることになる。もっとも修練を積んだ剣客は、必要なときしか剣を使わない。

一般的な武蔵のイメージは、ハムレットのように苦しい人生を送り、内省にふける人間である。武蔵の『五輪書』には『独行道』という部分があり、これを読むと、「身に楽しみをたくまず」、「れんぼのみちおもひよることなし」、そして「私宅において望む心なし」と書いてある。こう書いた武蔵は、われわれ一般人に、自身のさびしさと苦しみを見せている。どんなに強い人間であっても、武蔵は幸せになるのが怖かったようだ。というより、幸せを失うことが怖かったのだろう。

ひじょうにおもしろいのは二つの武蔵のイメージの違いである。神田のマンガでは、武蔵は偉大で、ほかの人と比べることなどできないぐらい優れた人物である。しかし、神田の武蔵は、あまりにも冷静で、人間と言うより、何も感じないロボットのような人間である。自分の剣の腕前を誇る一方で、自分のことを一人の侍であると謙虚にいう。井上の『バガボンド』で描かれる武蔵は、猛獣のように残酷で、乱暴な人間であるが、一方で、自分のそのような感情を見据える人間的な人物である。

来年、NHK 放送が吉川英治の『宮本武蔵』をドラマ化することになっている。その武



井上雄彦『バガボンド』

蔵がどんな人物になるか楽しみにしている。

・おわりに（侍の遺産）

最後に、侍たちが現代の日本に何を残しているか考えたい。

侍という言葉は平安時代に初めて現れた。平安時代より前、侍は「もののふ」、または、武士と呼ばれていた。最近の研究によると、彼らは、地主でも武器を持つ農場主でもなかった。侍は最初からプロの軍人であった。勇気、礼儀、面目、誠実という徳がものすごく大切にされた。

現代に侍はもういないが、サムライスピリットはまだ残っている。例えば、精神主義である。精神主義とは気が身体に勝つと考えることである。根性という言葉もある。精神主義とは少し違い、例えばスポーツマンはどんな障害があろうと最後まで頑張って、根性を見せる。彼にとって大事なものは勝利ではなく、苦勞して頑張ることである。柔道であろうと剣道であろうと違いはない。大切なものは目的を達成するまでの過程と気の形成である。毎年8月に、大阪の野球場で、高校野球選手権が行われる。16歳17歳の硬派のヒーローたちは、根性物に学んだのか、真剣な顔をして、優勝を戦う。これは侍の子孫ではないだろうか。

参考文献

Kure Mitsuo (2002) “Samurai – An Illustrated History” TUTTLE

Ian Buruma (1985) “Behind the Mask” MERIDIAN

Donald Richie (1990) “Japanese Cinema – An Introduction” Oxford University Press

Inazo Nitobe (2000) “Bushido” TUTTLE

宮本武蔵(2001) 『五輪書』講談社

吉川英治(2002) 『宮本武蔵』講談社

神田たけ志 『宮本武蔵』講談社

井上雄彦 (2002) 『バガボンド』講談社

ドナルド・リチー (1979) 『黒澤明の映画』キネマ旬報社

編集 (1986) 『講座日本映画』岩波書店